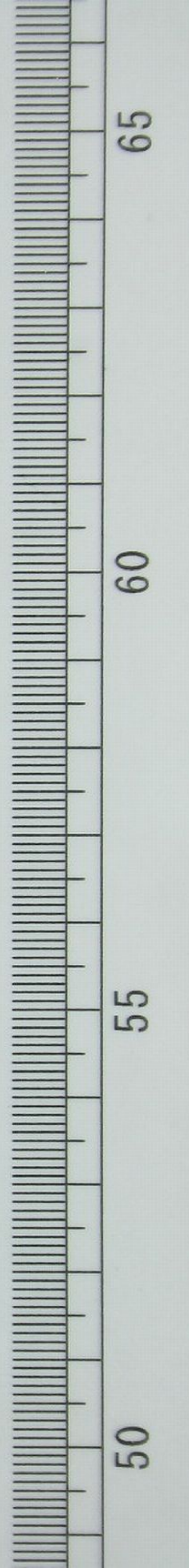


皇朝文獻
 卷之七
 目錄
 七

113
 1133
 2



小女とりよ又若とせりやとま

ちあはせ鹿 元

五月の比野結してまのきけいふほくとりよ和な松

よ火とていして鹿とすのま其火のひらり男鹿

てらよと射さそとあつて鹿とららふ

わもてらりからんこれと木のめろさるふ

あつていひの 昔中にも金也日月はあつて

おきぞめ也 におらいろのりり

の付也一洗先の根とつらまといふをねまをせてつらとま

左今と笑むよるひつこのあらしはれくあらうらまのまは

とまの帯 志は張りあふたこのやむい

よむらんし万葉一まの妹とむむら

ゆふく我身はかんぬ

こどりの林 緑林白波として 盗人とりよふまむとむと緑乃

林とりひ海まむむと白波とりよとかん

天のうさり一ま二津後湯交合あつ

とまの境乃ふあ既 今の法はままおまはるれりて後

其女子あつた五子かかんハまひりて地の人は妹むら

とゆつとととま ちちとまはかつてふ

子まふ一まをかかんちりりこれより根ま三ちとせの

花ちちとせまては根かといひのふふとまなれり

ちりりりちりりつあてこ ちりせ 鹿の西にゆりせを

りせのこひとるのあり ぬりり泥とりよあふりて

たのどろまかりのあり 鹿子よそあせとこせか

はらりの寝もむるのありのふらふらも

たかとぬ 後伸といひ人あちまふらひとらる

五郎

五郎

